

07・クラウドディアはわたしの、

『06・指も、おっぱいも舐められて、貝合わせする』から約五年後。

ある年の七月。白鹿女学院の学院祭。

クラウドディア、すっかり大人になっている。

今日は二人で学院祭に来ている。そろそろ帰る時間なのだが、若干早い。

時間つぶしにガーデンテラスにいる。

主人公は今、飲み物を買いに行っている。クラウドディアは席取りを任された。

クラウドディア、通りすぎる生徒たちを見ながら、この学校に通っていたころの事を思い出している。

……と、主人公が戻ってきた。

SE1 .. 外の環境音

【頭から最後まで流す】

【トラック終わりまでごく小さな音で流し続ける】

【0ー5秒ほどまで流してSE2】

SE2 .. 主人公の足音

【頭から流す】

【0ー6秒ほどまで流してセリフ】

● 中央 少し遠い

「先生。こっちです」

クラウドディア、主人公を見つけて手を振る。

さらに、ちよつとした遊びがしたくなる。

「わざと暗い雰囲気で。聞いている側に『えっ!? 二人は別れちゃったの!?』と誤解させる」

お久しぶりですね。いつ以来でしょうか」

〈主人公〉

「……とはいっても。

ジュースを買ってくるまでの四、五分ほどだけだけどね? 離れてたの!

デイデイってば、さっきからどうしたの。今日何回目だい? このやりとり。

新作はそういう方向性なの？ 『数年ぶりに会って再燃する元教師と教え子の愛』的な？  
わたしは書かないタイプの台本だよ!」

● 中央

「普段のテンションに戻る」

あはは♥ ちょっとやってみかっただす。

『母校の学院祭に来た、元教師とOG』とか。

いかにも『数年ぶりの再会』ってシチュエーションじゃありませんか。

実際に離れ離れだったのは数分ですけど。

飲み物ありがとうございます、いただきます♥」

〈主人公〉

「数年ぶりなんてとても耐えられません!」

わかってるでしょ？ わたしは暇さえあればいちやいちやしたい人なの。

わたしというキャラクターの解釈を根本から誤っています。

遠恋ものは嗜好じゃありません。よしてください!」

● 中央

「ふふ。私もです♥

あれだけ苦勞して両想いになれたんですから、もう絶対離れたくないです」

〈主人公〉

「苦勞！ まったくだ！ もう二度と学生寮の壁によじ登るなんてしたくないね。

まあ、あれはわたしがデイデイに会いたいからそうしたんだけど！」

● 中央

「あはは♥ それを言うなら、最終的に寒さとの戦いになった地下書庫での夜明かしも、その苦勞リストに加えて下さい。

【少し間をあけてから】

……そうだ。苦勞したといえば。

来週からプール開きみたいですよ。

【少し間をあけてから】

でも、今年から選択授業になったらしくて。

卓球と選べるらしいです。

変わっていくんですね。

私みたいな子がいなくなるんだと思うと、ホッとします」

〈主人公〉

「……そうだね」

主人公、その話を聞いて『ついに通ったか!』と安堵する。

プールの件に関しては、実は自分も、退職前に色々意見したのである。だが、これはさすがにクラウドディアには秘密である。格好つきたい。

クラウドディアの事なので、わたしのやる事なんて、全部まるっとお見通しかもしれないけど……。

ところで、プールと言えば。

〈主人公〉

「ところで、今更だけと言ってもいい?」

● 中央

「何を言われるのか全く予想がついていない」  
はい。プールが何か?」

〈主人公〉

「プールに落ちた日。あの流れでセックスしなかったの絶対おかしい」

クラウドディア、主人公が急におかしな事を言うので、思わず笑ってしまう。だが、確かにそうだ。しかしあの時はそんな発想すらなかった。純愛していたのである。今では見る影もないが……。

● 中央

「あはは！ 私もそう思います♥

プールであんな事になったのに、私たち健全過ぎでしたね。

【少し間をあけてから】

あの日の事、日記が残ってるので、今でも読み返すんですけど。なんだかとっても昔の事のように思えます。

【少し間をあけてから】

あの時はこんな風になれるなんて思ってもみませんでした。

【少し間をあけてから】

あの頃の私は、自分に自信がなくて。

先生の事を好きな人、全員を敵視して、嫉妬して。

そのうち私は、先生じゃないものをみんな嫌いになる。

どんどん嫌な人間になって、そんな自分に耐えられなくなって、最後には自滅するんだろうと思ってました」

〈主人公〉

「えっ!? そうだったの!?

わたしの中では、デイデイはずっといい子だったよ。

わたしのあれそれを許してくれた時なんか、本当に天使だと思ったよ!」

● 中央

「【内心『知らなかったんかい。さすが先生』と思っている】

そうですよ? 必死にいい子ぶっていただけで、ものすごく邪悪だったんです。

【少し間をあけてから】

でも、先生、優しいから。

いつも大事にしてくれるから。

私、何も嫌わなくてよくなっちゃった。

いつの間にか、自分の事まで許せるようになったんです。

【少し間をあけてから】

だからもし、私をいい子だと言って下さるなら、それは先生がいるからです。

【『いや、確実にいい子ではないな』と気づく】

というかやっぱり全然いい子じゃないです。

いい子は学校であんな事しません。ふふふ♥」

クラウドディア、明るく笑う。

主人公は、それを見て安堵する。

五年前、主人公はクラウドディアの卒業を待って、教師をやめた。

今はまったく違う仕事をしている。

それは『自分みたいなのが教師をやっているのはどうなのか』という理由からだったのだが、これを打ち明けた時だけは、クラウドディアと揉めた。

クラウドディアとしては辞めてほしくなかったようなのだが、こればかりは応えられなかった。

自分はよい先生ではなかったし、この先よい先生になれる気もしなかったからだ。

それならせめて、クラウドディアだけの先生になりたいと思ったが、それにすらなれなかった。

思えば六年前、クラウドディアをプールに誘った日から、自分は先生をやめていた。



その後も学院に残っている方がおかしかったのだ。  
だけど、そんな自分をクラウドディアは今も変わらず慕ってくれている。  
最近、彼女ではなくなったが……。

● 中央

「大好きです。」

先生は私に自由をくれました。  
人の目を気にして怯えて。

いつも隅に隠れていた私は、あなたのおかげで、こんなに変わる事ができました。  
今は、なんだってできる気がします……特に、先生のためならね♥」

〈主人公〉

「デイデイ……」

● 中央

「あ。そろそろ時間ですね。行きましようか」

〈主人公〉

「あ!? うう……。ねえ、本当にバス乗るのー?」

●中央

「『今更何を言う?』という感じで」

ええ、そうですよ? 他に交通手段ありませんし」

〈主人公〉

「何とかしてこの未来を回避できないの?」

●中央

「恨むならこの田舎の女子校を恨んで下さい。」

先生にはこれから、六年前先生を恐怖のどん底に陥れた呪いのバスに乗っていただけです」

しかし、最近彼女をやめたクラウドディアは、主人公に手厳しい。

今も、有無を言わせない雰囲気がある。

主人公は、クラウドディアが自分と交際するようになって、本当に明るくなったと思う。

明るくなっただけじゃなくて、自分の意見をはっきり言えるようになったようだし、意

に沿わない事をさせられて、困っている姿を見る事もなくなった。

自分は、教師としては本当にダメだった。

だが、クラウディアの『』としては、今も割といい仕事ができてるんじゃないかな、と思う。

### 〈主人公〉

「やだー！ あの手、トラウマなんだよー！

ねえ！ またあの人に乗ってたらどうする？

わたし今度こそ泣くよ！ 泣いちゃうよ！」

一方、クラウディアは、ごねる主人公にちよつと驚いている。

なんだこれ。今日に限って、随分食い下がるな。

ていうかこの人、そもそもここまでバスで来たの忘れたの？ と思う。

しかしその次の瞬間、あ。これわたしから甘い言葉引き出したいやつだ。

いわゆるいつもの茶番だ。と気づく。先生は『言わせたいタイプ』だから……。

なので、それに応える事にする。……これから言う事は、もちろん本心だし。

● 中央

【上機嫌で】

ふふ。何が来たってご安心下さい。

これから先、何が現れようと。先生は私が守ります。

【少し間をあけてから】

だって私は、先生のお嫁さんなんですから♡

……ね♡」

SE3 .. 主人公とクラウドディアが椅子から立ち上がる音

【頭から流す】

【0―2秒ほどまで流してSE4。このあとの『キューイツ』という嫌な音が入らないようにする】

SE4 .. 主人公とクラウドディアが椅子をもとの位置に戻す音

【頭から最後まで流す】

SE5 .. 主人公とクラウドディアが歩き出す音

【SE2と同じ音】

【途中から流す】

【8―15秒ほどまで流してフェードアウト】

このままフェードアウトして終了。